
靴を履いた、おうじさま

あやとお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

靴を履いた、おうじさま

【Nコード】

N5483X

【作者名】

あやとお

【あらすじ】

誰もが自分という存在を僅かに偽りながら過ごす高校生。一人の女子高生は空に思いを馳せながら日々を過ごしていた。そしてまた、彼も地に足の着かない存在を、生きていた。

そんな二人が高校生になって、初めての夏を過ごす。

仰ぐ

小さい頃に、一度だけ飛行機に乗ったことがあった。

父親を早くに亡くし、女手一つで私の事を育ててくれた母が事故で他界して、私は沖縄にいる祖母の所に行くことになった時だ。まだ小学五年生だった私は母の妹の叔母さんに連れられて飛行機に乗った。その日は雨で、搭乗口に着くまでの道のりが黒く重かった。

この時私は、目の前の鉄の機体に押し込められて、きつと何も無い地の果てへ連れて行かれるのだと思った。

飛行機に乗って、離陸した際に頭がずんと重くなり、このまま私という存在自体が潰れて無くなるんじゃないかと思った。むしろ、そうなればいいと思っていた。そうなれば、もう何も考えなくていい、何も感じなくていいと思ったから。

けれど、私の体は潰れることは無かった。体はそのまま存在して、ただ気圧からくる頭痛と気だるさだけが体に残っていた。私はその重い頭を持ち上げて小さな窓を見た。

とても驚いたのを覚えている。窓の外に広がっていたのは一面の青空だったからだ。話で聞いたことはあったが、本当に雲の上はいつでも晴れているんだと、その時初めて知った。そして私はそこでもう一つ、不思議な光景を目にした。遠くに浮かぶ雲の隙間に、まるでコマのような形をした飛行船を見たからだ。飛行船という表現があっているのかはわからないが、上手い言い回しが見つからないので、今でもそれを私はコマの形をした飛行船と呼んでいる。

コマというのはもちろん、あの回して遊ぶコマのことだ。下向きにしぼむような台形の形で、少し丸みを帯びていたと思う。けど、それを見たのは一瞬のことだった。それはまるで、私に見られたのに気がついて急いで姿を消したようだった。

今でもあれば、頭痛のせいで見た幻覚だったのかもしれないと思う時もある。でも、多分現実だったんだと思う。いや、思いたいのかもしれない。

その後すぐに沖縄につき、空港で待っていた一度も会ったことの無い祖母に痛くなる程抱きしめられて、私はここで生きていくんだと、実感した。

セミの声が激しく降り注ぐ田舎の小道に座り、私はビニール袋に入った沢山のマドレーヌを取り出して、その一つを口に入れた。マドレーヌは粉っぽくて口の中の水分を奪っていった。決しておいしいとはいえない。

一口齧ったマドレーヌを口から離し、空を仰いだ。首筋に一筋の汗が流れてゆくのが分かる。そろそろ夏休みに入る。高校生になって初めての夏休みだ。だからと言って何か予定があるわけではない。とりあえず、宿題を早めに済ましてしまおうと思っっているくらいだ。粉っぽいマドレーヌを再び一口齧り、ゆっくりと顎を動かした。ダマになった小麦粉が割れて少し咽た。鞆からペットボトルを出してお茶でその粉を全て流し込んだ。

空を見ていると、もう一度空に行きたいと思う。どこに行く訳でもなく、ただ空の上に行くためだけに飛行機に乗って。そのまま再び沖縄に戻ってくればいい。そうしたらもう一度、あの飛行船を見ることが出来るだろうか。

そんな事を思いながら、残りのマドレーヌを一気に口に頬張って、お茶で流し込んだ。

「そんなにつらそうにマドレーヌを食べる人を初めて見たよ」

私のすぐ後ろから聞こえてきた声に振り返ると、見覚えのある男の子が立っていた。同じクラスの男の子だった。けれど今までまともに会話をしたことのない彼の名前を、すぐには思い出せなかった。そんな私を悟ったのか、彼は「吉名さんの斜め後ろの席にいる、ハニワです」と優しい声で言った。

羽庭ヒトネ。思い出して私が、ああと呟くと彼はゆっくり私の横に座った。

「そのマドレーヌ、そんなに美味しくないの」と彼は私の膝の上に沢山置かれたマドレーヌを指差して言った。調理実習で分量を適当にして失敗させたから、その処理を押し付けられたと言うと、彼は体で笑い私の膝の上からマドレーヌを一つ手に取って思い切り齧りついた。

「多分粉吹くよ」と忠告した私の言葉が悪かったのか、それとも粉のせいなのか。彼は噴出して咳き込んだ。私はペットボトルのお茶を渡そうかと思ったが、今さっきまで私が飲んでいたそれを渡していいものか迷い、彼が落ち着いたのを見て手に持ったお茶をそっと鞆に戻した。

「確かに粉っぽいかもしれないけど、食べれないこともないよね」
そう言つて彼が笑つたから、私も笑い返した。

羽庭ヒトネは、いまいち分かりにくい存在だと思つていた。クラス男子のようにバカ騒ぎをしている所を見た事がない。かと言って鼻にかかるような孤立した存在でもない。皆と会話をし、少し笑つて、授業を受ける。そこにいる存在。

分かりにくい存在である彼を、私は自然と避けていた。自分で言うのも何だと思つが、私は変にプライドが高く、誰かから小バカにされたり嘲られる事を極端に嫌つていた。だから私はいつても自分からお調子者の人間を演じていた。そんな私を笑われてもバカにされても、笑われているのでない、笑わせているのだと思うようにしていた。

けれど、彼はそんな単純な存在ではないと心のどこかで思つていたのか、彼に対してはお調子者を演じることは出来なかった。きつと何をしても見透かされてしまいそうで、無意味に思えたんだと思う。

だから今こうして話していても、どうにも上手く言葉が出てこなくて少し困つた。何を言つても彼には見透かされているような緊張

感があつたからだ。

「吉見さんはよく空を見上げているよね」

「え？」と自分でも間抜けだと思つような声が出た。彼の口からそんな言葉が出てくるとは全く予想だにしなかつた。そんな間抜け顔をした私に、彼は人差し指を軽く空に向けて再び私に微笑んだ。

「うん、そうだね。見てるかもね」

とてもぎこちない返事をしたと思つた。けど彼は気に留めず、またすぐに続けた。

「空には何かある？」

「何かあればいいなって、思っているかも」

「ここは嫌？」

「ここつて、地上？」

「うん」

「嫌じゃないよ」でも。と私は続けた。「たまには上を見上げてみて、そこに何かあるんじゃないかって思うと、ここでもやっつけてけるような気になるから」

全てを言った後で、急に恥ずかしくなつた。一体何をベラベラと、今までまともに会話もしたことのない人に話しているんだろうと、顔が熱くなつた。でも彼は笑わなかつた。彼は顔を空に向けて、そうか、と呟いた。

「思つていれば、ここでもやっつけていけるのか」そうか。とまた最後に小さく呟いた。そう言つた彼の横顔は、爽やかに見えて、少しだけ、悲しそうにも見えた。

吉谷さん（前書き）

吉名さん

「吉名さん、さっきの授業のノート見せて貰ってもいいかな」

吉名さん。私の名前がとてもなくすぐつたい音を立てて後ろから聞こえてきた。その声の持ち主は羽庭ヒトネという同じクラスの男子だった。

一昨日、偶然帰りの道で少し言葉を交わす機会があった。かと言って次の日から急に仲良く教室で笑い合うという事もなく、普段通りにお互いの日常を過ごしていた。その日、彼の横顔をよく見た事くらいだろうか。

そんな昨日という一日を置いて、彼は私に声をかけてきた。

「私の字、汚いからすぐく見にくいと思うよ」

「大丈夫、分かるよ」

「どうして」

「斜め後ろから、よく見えるから」

私の斜め後ろが彼の席だった。「斜め後ろから私のノートを見るより、黒板を見てた方がいいと思うよ」と抑揚の無い声で言うと、彼は「興味がないもの見ていると眠くなっちゃうから。でも世界史の先生、ノートちゃんと思わないと怒るでしょ」

あの先生好きになれない。と言ってノート渡した。彼もそれに同意してノートを受け取った。その時、別教室から友人が数人やつてくるのが見えた。二人は中学生の時から友人で、クラスが別になっても休憩時間になる度にこうして私の所に来ている。

彼が次に何かを言おうとして口を開いたのが見えたけど、私はわざと大きな音を立てて席を立ち「友達が来たみたい。じゃあね」と八キ八キとした口調で言っつて、教室を後にした。彼が何を言おうとしたのかは、分からない。

昼になり、いつもの友人と三人で中庭に出てお弁当を広げていた。別々の教室になってもお昼は一緒に中庭で食べようね。と言い出したのは、甚だしく高校デビューを決めた菜々美だった。中学生の頃から仕切るのが好きで、菜々美が言った事には肯定するしかなかった。反対でもしようものなら、その日からきつと私は独りになる事だろう。そのエネルギーが高校生になるとより爆発した。髪に色を入れて毎日根気良くそれを綺麗に巻いてきていた。スカートも短くしていたけれど、その事について二年生の人に一度激しく睨みをきかされていた事があった。菜々美の呆れる所は、そういった面倒事になると、いつも私を同伴させて行く事だった。虚勢を張るだけ張って、その後私に同意を求める。もちろん、肯定以外の言葉は許されない。そうして先輩方の怒りの矛先は私に集中するのだ。

そしてもう一人、一緒にいる翠は正反対な子だった。こっちが先導しなければ会話どころか、言葉さえ発つしてくれないような子で、きつと世間一般から見れば「地味」という言葉で括られてしまうような子だった。高校生になっても中学の時と変わらず黒い髪を肩まで伸ばし、不器用なのかただただ気に留めてないだけなのか。黒い髪留めゴムで色んな所の髪の毛を巻き込んで縛っている。結んでいる、ではなく、縛っている。の方がきつと合っているんだと思う。菜々美が私の前に立つ子なら、翠は私を盾にする存在だった。問題が起きた場合、菜々美は私を連れていくが、翠は全て私に流して来ていた。「らしいけど、どうする」や「こういうのは私には無理だと思うな」などと言って、翠の目はいつも私に向いてくるのだ。

ここまで散々一緒にいる友人二人の事をあれこれと言ったが、結果それでも居場所を失わないようにと今の関係を保っている私も私だと思う。本当は、何も言える立場ではないのだ。

「ねえ、ぶるつちとさつき話してた男の子って誰？」と菜々美は、いつも母親に作って貰っているお弁当の、星やハートの形をした楊枝にささったミートボールを一つ口に頬張って聞いてきた。『ぶるつち』というのは、私の吉名葵という名前から、菜々美が昔「あお

いでブルーだから、ぶるっちな」と言ったのをきっかけにずっと呼ばれているあだ名だ。その呼び名は菜々美しか使わないし、中学生が考えた恥ずかしい呼び名を今でも使われるのは正直勘弁して欲しかった。

けれど今はそんな事より、菜々美のその言葉に何か冷たい物が私の背中を撫でた気がして、私は箸の動きを止めた。

「羽庭くん、さっきの授業のノート取り忘れたから私に貸してくれって」

「なんでぶるっちななの」

「席が近いからかな」

私は冗談を言うようにわざと声色を高くして、箸をカチカチと鳴らしてみた。けど菜々美は笑わなかった。

「席が近いだけじゃ普通男子が女子にノート貸してとか言わくない」菜々美は隣の翠に向けて言った。翠は突然の問いかけに視線を菜々美に向けて、すぐに黙って二度頷いた。そして私を見る。

「だって、真面目にノート取ってたのが私ぐらいしかいなかったみたいだし。だからでしょー」

声に抑揚をつけ、まるで上司にゴマでも磨っているかのような言い方だと思った。真面目になんて授業は受けていない、むしろ私以外の人の方がしつかりとノートを取っていただろうし、きっと字も綺麗だ。けれど、そんな事は言っではいけないのだ。

「そだよねー、えーさっきの人さー、ちよっとカッコ良くなかった？私全然イケるんですけど」

カッコいい、全然イケる。は菜々美の口癖になっていた。高校に入ってから、少しでもいいと思った人を見つけてはそう言っている。菜々美がイケても、相手は無理かもしれないのに。とよく心の中で思っていた。けど、今回はいつものように軽くあしらう気持ちになれなかった。むしろ、何故菜々美に彼が評価されなければいけないのか。それが腹立たしくてたまらなかった。

「羽庭くんって面白くて、私の作った失敗作のマドレーヌも食べ

れなく無いって、無理に食べたんだよ」

無意識に出た言葉だった。誰に言うでもなく、ただ焦点の定まらない目をお弁当に向けて、滑るプチトマトを何度も箸で取るうとした。横で小さく菜々美が、なにそれ。と吐き捨てるように言ったのが聞こえた。心臓は今にも破裂してしまいそうな程鼓動を打っていたのに、何かをそれを強く支えていた。

特別

5時限目が始まるうとした時、教室で彼が私にノートを差し出してきた。

「ありがとう、助かったよ」

「そっか、よかった」毎回思うけれど、私が彼と言葉を交わす出てくる言葉はどれも淡白なものばかりになった。菜々美達と話す時のように、声に抑揚をつけてみたり冗談のような口調で喋ってみたり。何故だかどれも彼の前では無意味に感じられた。

「あのさ、吉名さん」彼が何かを言おうとしたけれど、私はすぐに席について彼に「次は日本史だね」と軽く微笑んだ。彼も微笑み返した。

放課後になり、掃除の時間になった。掃除が終わったらすぐに帰ろう。きつと速足で行けばバスの時間も間に合うはずだと何度も自分に言い聞かせた。ごみ箱を手に、焼却炉まで足早に向かった。焼却炉にゴミを投げ込み鉄の蓋を締めようとした時、遠くからそれに待ったをかける声が聞こえて振り返った。遠くから走ってくるのは彼、羽庭ヒトネだった。

「家庭科室のごみも溜まっていたから、僕が」彼は少し息を切らしながら笑顔を作った。その笑顔に私はぎこちなく笑顔を作った。同じようにごみを焼却炉に入れ、今度こそ蓋を締めた。ごうごうと炉の中でさつき放り込んだ紙くずや埃が燃えていく音がする。少しの間、二人でその音をただじっと聞いていた。次に彼が口を開いた時、私は咄嗟にバスが出ると言って踵を返していた。そして、向いた先に立ってこちらを見ていた人物に目を丸くした。

「ぶるっちじゃん。何々、同じクラスの人デスカー」菜々美の黄色い声が耳に響いた。彼は微笑んで菜々美に挨拶をした。お昼に話したから分かっているはずなのに、菜々美はわざと知らないふりを

している。これは私に紹介させようとしているのだとすぐに分かった。

「私ぶるっちの友人のー。あ、ぶるっちっていうのは吉名さんのあだ名なんですけど、名前が葵っていうからブルーのぶるっち。笑えますよね」

菜々美は絶えず彼に話しかけ続けている。笑えると分かっている。菜々美は私に今もこのあだ名で呼び続けているのだ。分かっている。分かってはいたけれど、本人の前で堂々と言えたものだ、私は何も返さずただ黙って菜々美と彼とのやりとりを、と言っても菜々美が一方的に話しているだけなんだけど、それを見ていた。

「てかぶるっちさ、さつきバスがどうか言っただけじゃなかった。帰らなくて大丈夫」菜々美はきょとんとした表情を私に向けて言った。私は、そうだった。と言っただけじゃなく二人のどちらにでも無く、じゃあと言っただけから去ろうとした。

「吉名さん」耳を撥る、彼の声があった。

「また、時間あったら一昨日みたいに話そう」それだけ。と彼は言った。走り去ろうとする私の背に向けて彼が言ったのだ。私はゆっくり振り返った。彼の横に、明らかに不機嫌で不満たつぷりな顔をした菜々美がいた。けど、それがどうしたと言っただろうか。今、目に入るのは彼の少し焦った表情だけだった。ずっと、言おうとして言えなかったその一言を。菜々美の会話を振り切ってまで言ってくれたのだ。

「うん」

私は今日、一番の笑顔だったんじゃないかと思う。そしてその肯定的な返事は。絶対的な私自身の言葉だった。「うん、また、明日」私は彼に、彼にだけそう言っただけで、軽快な足取りでバス亭まで駆けて行った。

菜々美の事なんてもう考えられなかった。明日、彼にまた会える事だけしか、もう頭になかった。

もちろん、考えなかつたわけじゃ無かつた。次の日、休憩時間に二人は私の所へは来なくなつていた。でも辛いとはさほど感じなかつた。けれど、それを私以上に気にしている人がいた。彼は休憩時間に一人でいる私を見て、何かを悟つたようだった。

「僕は、吉名さんにとても酷い事をしてしまつたんじゃないだろうか」彼は本当に困つた顔をして私にそう言つてきた。その表情が本当に困つた人の顔そのもので、私は思わず吹き出してしまった。彼がこんなにも人間らしい表情をするのが、何だかとても可笑しく思えたからだ。

それでも、何とか彼を安心させようと私は素直に話した。

「私ね、無理して誰かと会話するよりも。黙つていても、空を見て過ごしている方が好きなんだ」自分でもよくすらすらと言葉が出てくるものだと思つた。きつとそれは心から素直に思っている事を口にしていくからなんだと思う。すると彼は安堵の表情を見せて、また微笑んだ。

お昼になつて、私はお弁当を持って初めて屋上に上がつてみた。そこには既に何人もの生徒がいて、それぞれにお気に入りの場所を作つてお昼を食べていた。私はフェンスで角になつている所にゆくり腰をおろして、持つていたお弁当を広げてみた。いつもより卵焼きが鮮やかに見えた。太陽が近いからだろうか。箸を手に持ち、合掌の手を作り小さくいただきます。と言つてお弁当を食べた。

「ここにいるんだと思つた」

そう言つて羽庭ヒトネは両手にビニール袋をぶら下げ、屋上の入口扉から私を一直線に見た。屋上にいる何人かが彼と私とを交互に見て笑つていた。私は恥ずかしいより、驚きの方が勝つてパチクリと瞬きをした。彼は周りの声も気にせずビニール袋を揺らしながら私の傍まで来て、すとなつと横に座り込んだ。

「売店で人気のチョコメロンパンが残り一個だつたんだ。いつもは諦めるんだけど、今日はちょっと頑張ってみようつて気になつてほら、僕勝つたんだ」

彼は一気に話すと、誇らしげに少し潰れたチヨコメロンパンを私の目の前に差し出した。彼のその表情があまりにも無邪気で、私は何もかもが可笑しく思えて、自然と声を出して笑った。すると彼も、声を出して笑った。

ビニール袋の中に一体いくつのパンが入っていたのか、気がついた時にはパンの空き袋が沢山転がっていた。見た目に反して彼は意外と大食いなのだと知った。知れた事が、また少し嬉しかった。

私もお弁当を食べ終わり、巾着袋の中にお弁当箱を片付けていると。しばらく空を見上げていた彼が息を漏らすように口を開いた。

「本当に、青いな」

「ん？」何も考えず、普通に返事をしてしまったから気がついた。私を呼んだ訳じゃない。彼は空を見て、青い。と言っただけだ。

彼は不思議そうに私の顔を見て思い出したように、ああ、と言っ
て微笑んだ。

「吉名さん、あおいつて名前だったよね」

私は恥ずかしさで顔をそらしたまま、うん。と答えた。葵と呼ばれる事に疑問も持たず普通に返事をしてしまった自分が恥ずかしくてたまらなかった。

「あおいつて、綺麗な名前だね」彼はそう言った。素直に驚き、そして少しだけ顔が熱くなるのを感じた。今までにいい名前だとか、可愛い名前などと言われた事はあつたけれど、「綺麗な名前」と言われたのは初めてだった。綺麗と言われるのは、とても特別な気がして、私を指し示す特別な言葉なのだと言われたようで、まるで自分自身が特別な存在にでもなったような気がした。

「ヒトネって、珍しい名前だよね」私は浮かれる心を悟られまいと、話題を彼の事に変えた。「うん、昔はよくからかわれた」そう言っ
て彼は微笑む。

「じゃあ、その名前は嫌い？」

「いや、結構好きなんだ。珍しいからこそ、僕だけを表している

特別な言葉だつて気がして「変かな。と言つて彼は私に振り返つた。よく珍しい名前を付けられて不満に思つている子を見ると、自分だけの特別な名前なんだつてもっと誇りに思つて堂々とすればいい。」と思ふ事があつた。それでも、つけられた本人にしか分からない葛藤があたりするのだろうと思つて口にした事は無かつたけど。そんな考えをしている本人が本当いた事が、私は嬉しかった。

「ううん、私ヒトネつて名前好き。ヒトネは、ヒトネの特別な名前だと思ふ」

嬉しさのあまり、私は体を乗り出して顔を彼に近づけていた。彼が照れて顔を引いたのを見て、私も気がつき咄嗟に身を引いた。それに私は本人を目の前にして何度も名前を呼び捨てにしていた。

予鈴が鳴つて、私が急いでその場を立つた時、彼がゆっくり立ち上がりながら大きく伸びをした。

「結構好きだつたんだけど、葵さんがそう言つてくれると、もっと特別になつた気がする」彼がそう言うので、私は持っていたお弁当箱を軽く宙に投げた。

「私も、綺麗な名前なんて素敵な事言われたの、ヒトネが初めてだ」言つて、お弁当箱をキャッチした。本当に、いい天気だ。

おっじさま

夏休みまで後五日を切った。もう学生の心は半分休みになって浮かれていた。とにかく私は宿題を早く済ましてしまおうと、それだけを思っていた。思っていたけれど、今少しだけ、私は夏という舞台に参加してみようかと、思っている。

屋上でお弁当を食べていると、彼がやって来た。これと言って約束をしている訳ではないけれど、私が屋上でお弁当を食べるようになってから彼は毎日ビニール袋を手にはぶら下げて私の隣に座った。一人になった私に気を遣ってくれているのか、それともただ単純に私に会いに来てくれているのか。

いつものように彼が最後にクリームパンを開けて食べていた時、私は空になったお弁当箱に視線を落とし、次の言葉に詰まっていた。言おうか、どうか。

「葵さん、今日は少しおとなしいね」

初めて屋上で一緒にご飯を食べて以来、二人だけである時だけ、たまにこうして下の名前で呼んでみたりしている。これも約束や決めた事じゃないけれど、何となくこうなった。

「そうかな、普通かな」何でもないように答えたつもりだったけど、どこかぎこちない返事になってしまった。彼は残りのクリームパンを一気に食べてしまうと、すっと立ち上がりそこからまた上を向いた。風が強いせいで上空に浮かぶ雲の流れがとても速い。

「葵さんは、以前。空に何かあると思えば、ここでもやっていくって、言っていたよね」

突然の問いかけに少し戸惑いながらも、私は頷いた。彼はそのまま続けた。

「何かって、例えばなんだろう」

「……私の知らない、世界。とか」

「なら、知ってしまったえばもう、それは葵さんの生きる支えにはならないんだろっか」

彼は時々、知らない人のような表情をする時がある。ついさっきまで楽しそうに笑っていたかと思えば、急に、ここじゃないどこか遠い所に思いをはせているかのような表情になる。

あの帰り道に見せた、どこか悲しそうな表情の訳も、私は知らない。「知って、それが私にとってどう有り得るかにもよると思うな。それだけのものかって、思えば終わりだし。心を全て持って行かれるほどのものなら、また違うと思う」

そう言っただけで彼は彼を見上げた。彼は見上げていた顔を下ろし、私を見下ろしていた。笑っているのか、悲しんでいるのか。彼はゆっくり座った。そして自分の足先に視線をやって、口を開いた。

「僕は、支えにはならなかったよ」彼は囁く。

「知ってしまったって、それだけのものかって、思ってしまった」そして彼はゆっくりとこちらに振り向いた。

「葵さんの言うその世界に、行く術があるとしたなら。行きたいと思っかい」

私は何も言えなかった。一体何が彼の支えに成り得なかったのか、何が彼をがっかりさせてしまったのか。そして、私は本当に、そこに行きたいと思っっているのか。

次の日、空は鉛色に染まり、授業中ポツポツと雨が降りだした。

お昼になって、教室で彼の姿を探しても見当たらなかった。屋上かと思っただけで、目に見えて雨が降っているのに行くわけがないと、売店を覗いてみたがそこにも彼の姿は無かった。仕方がなく教室に戻って一人お弁当を広げようとしたが、何かが引っかかって、広げかけたお弁当を戻して私は屋上へと駆けて行った。

いつもより暗い階段に私だけの足音が響いた。屋上へ繋がる扉の前にある踊り場に、彼はいた。半分だけ開けられた扉の向こうに広がる雨の降る景色を、何も言わずただただ見つめていた。

私は息を整え、ゆっくり彼の傍まで歩いて行つた。

「ヒトネ君。今日は屋上、無理だと思つな」私の言葉に、彼は外の景色を眺めたまま、うん。と小さく呟いた。

「今朝、懐かしい夢を見たんだ」私は彼の横顔を見た。「そうしたら、勘違いしてしまつて」彼は私にと言つよりも、自分自身に言い聞かせているようにぼつりぼつりと呟く。

「そつだ、ここは。雨が降ってくる世界だつたんだつて……」最後の方は、外の雨音にかき消され、何と言つたのか、上手く聞こえなかつた。

私は、教室に戻ろうよ。と言つて、ヒトネと、暗い階段をゆっくり降りていった。

夏休みまで、後三日になつた。夏休み中の宿題として配る英語の冊子作りのため、私は一人視聴覚室で幾つもの冊子にホチキスをしてきた。こういった単純作業を黙々とこなすは好きだつた。誰かに気を使わず、ただ目の前の仕事を終わらせるために手を動かす。けど、冊子を両手に視聴覚室に向かう私を見て、ヒトネは、後で手伝いに行くと言つた。それがほんの少しだけ、待ち遠しかった。早く終わらせてしまつたら、彼と一緒にいる時間も短くなつてしまうのではないかと、いつもより、少しだけ丁寧にホチキスを止めた。

彼が来て、一緒に冊子を作り出した。時々話して、時々二人のホチキスの音だけが響いた。残り二冊になつた時、私はそれをとて大切なものを扱つようにしてホチキスを通した。最後の一冊は彼がもう留めただろうと見ると、彼は何か躊躇うようにその冊子を手を、冊子では無く私の方に顔を向けていた。

「何？」素直に疑問に思つて聞いた。彼は言つた。

「葵さんは、きつと見た事があるんだらうね」

「何を？」

「僕の故郷を」

「…沖繩？」

「空の上」

彼は言い終わり、持っていた冊子にホチキスを留めた。全ての仕事が終わった。とても不思議な発言だったはずなのに、私はとりあえず彼から冊子を受け取り、ちゃんと部数通りあるかを確認した。確認し終わって、私は冊子を整えて横に置いた。

「あのコマのような飛行船がそうなんだ」私は自分でも驚く程普通にそう言った。

「うん、やっぱり。葵さんは見てると思ったんだ」彼は呆れたように笑った。私は今更ながら口に手を当てて、笑った。

「何で二人とも、お互いの発言を不思議に思わないのかな」

「分かるから、かな」と彼が微笑む。そうか、そうなんだ。「冗談でも、嘘でも無いって。どうしてだか理屈じゃなくて、分かっただけだ。二人とも。」

彼は、空の世界の、王子さま。なんだって。

これは、冗談なのか本当なのか、ちょっと分からなかったけど。多分、本当。

そして私はここずっと、言おうと思って言えなかった事を言った。夏休み、一緒に、遊びに行きませんか。おうじさま。

外の世界

夏休み前日、私は彼の世界の事を沢山聞きたかったけど、我慢した。夏休み、私は彼を遊びに行くのに誘った。そして彼はそれを受けてくれた。時間は沢山あるのだ。焦る事はない。終業式が終わって、私は彼と一緒に帰った。しばらく曇っていた空は綺麗に晴れ渡り、うっすらと鼻の頭に汗をかいた。

「夏休み、どこに行こうか」そう言った彼は、これから夏休みを楽しもうとする普通の高校生のようだった。一体どこが王子さまだと言うのだろうか。夏休みにはまだ入っていないけど、私は彼に少しだけ聞いてみる事にした。

「どうして、私がヒトネ君の故郷を見た事あるって、思ったの」私のその質問に彼はちらつとこちらに視線を向け、またすぐに前に戻した。

「葵さんの空を見上げるその目に、よく映っていたから」そう言っただけは笑った。私は驚いて、嘘。と呟いた。彼はすぐに「ウソ」と言っただけ笑った。完全に騙された私は少し頬を膨らませた。

「でも少し本当」と彼は言った。「葵さんの空を見上げるその瞳は、何かを探しているように見えたから」彼にそう言われて、少しだけ納得した。確かに私は、いつも顔を上げて空を見ているようにもっとその先を見ようとしていた気がする。その先は、きっとあの世界。

「それにしても、本当によく私がいいつも空を見ているなんて気がついたね」少し照れて声に抑揚があった。彼は微笑む。

「よく、見ていたから」彼のその一言に、私は次に何も言葉が出てこなかった。誤魔化すように軽く笑ってみた。不自然だと自分でも分かる。けど、精一杯だった。

夏休みに入って、家に居ても仕方が無いと近所をただ目的も無く歩いていった。その間、いつヒトネを誘って遊びに行こうか、どこに行こうかなんて事を考えていた。だから余計に驚いた。彼が目の前をもの凄い速さで駆け抜けて行ったからだ。けれど目的地の定まらないのか、彼の足はもつれて今にもこけてしまいそうだった。

「ヒトネ君」私の声に気がつかないのか、彼はまだ一人ぐるぐると走り回っている。私がお腹から出した大きな声で「ヒトネ！」と叫ぶと、彼はピタリと止まってゆっくりとこちらを見た。

「どうしたの、何があつたの」

「……チトが」彼の焦点の定まらない瞳はかろうじて私に向けられていた。声が少し震えているようだった。「チトがいなくなつたんだ」言い切つて、彼は辺りをキョロキョロと見渡し、また走りだそうとした。私は急いで彼を止めた。

「チトつて誰、いなくなつたのなら私も探すから、教えて」動揺している彼と正反対に、私はハキハキと一つ一つしつかりと口に出して言った。彼は私の目を見て、そして小さく「うん」と呟いた。

チトはネコの事だった。黒くて緑色の首輪をしたネコだと言う。

「ネコならそのうち帰ってくるものじゃないの」と言うと、彼は力無く首を横に振つた。

「チトは外の世界を知らないんだ、体が弱くて、生まれてからずっと家において、外には一度も出た事なんてなかった」チトは家以外の世界を知らない、外なんかに出たら独りきりになってしまう。と言った。

その場にしゃがみ込み、うなだれる彼を見下ろして、私は思っていた。きつと、そのチトと言うネコはもう二度と帰ってくる事は無いのだろう。

後日、前回と同じ場所で彼と出会った。チトは帰ってきたかと思いたら、彼は少し残念そうに首を横に振つた。

「もう帰って来ない気なんだ。外の世界が、気に入つたんだ」

「ヒトネは、嫌い？」

そう聞くと、彼は空を見上げた。「好きになりたい」と言った。彼の言う外の世界はきつと地上の事なんだろうと思った。

「ねえ、山に登らない」不意に、すぐそばの山に行ってみたいと思った。いつも家から見える山だったが、沖縄に来てから一度も登った事が無かった。

「あの山なら、一度登った事があるよ」

「この世界の私がまだ登った事ないのに、何故ヒトネが登ってるのよ」と笑った。彼も笑う。「地上に降りたその日に、登ったんだ」と彼は言った。

傾斜の緩い登山道を、私達はひたすら登った。蝉の鳴き声が四方八方から降り注いでくる。しばらく無言で歩いていたが、途中彼が一人で話し出した。

彼には双子の兄弟がいると言った。兄の名前はイツネと言って、頭も良く出来た人物だったらしい。けれど、空の世界の王は神聖な存在で、唯一無二の存在として崇められる存在だった。なのに、そこに双子の王子が生まれてしまった。

「もしかして、それでヒトネは空の世界からこっちに？」と私が聞くと、後ろに行く彼は足場を確かめるように下を見つめたまま、そう。と答えた。

「でもそんな事知らなかったんだ。十歳になって、お祝いにただ地上の世界に遊びに来ただけだと思っていた」

初めてはかされた靴下と靴が、なんだか気持ち悪くて嫌だったけど、ここにいる間だけならって我慢した。けれど僕を連れてきた小さな船はそのまま帰っていった。僕と世話役の老人だけを残して。僕は慌てて走った。気持ちの悪い靴を脱ぎ捨てて一心不乱に空へと帰ってゆく船を追って。

「その時、空に近いこの山に登ったんだ」

「それで、船は」

「すぐに見えなくなった」

足には今まで味わった事の無い痛みが走り、擦り傷と切り傷で真っ赤になっていた。その後を追ってきた世話役の老人に、無理矢理靴をはかされて、ここで生きていくんだと言い聞かされた。

山の中腹まできた所で、ベンチを見つけて二人で座った。町の景色が少しだけ顔を覗かせていた。

「帰りたい？」私がそう尋ねると、彼は何も答えなかった。代わりに、チトもこの山を登ったかな。と呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5483x/>

靴を履いた、おうじさま

2011年10月21日03時02分発行